

青年期女子における「結婚」像の変容について

川 畑 佳 子

A Study on the Transformation of the Image of "Marriage" of the Young Women in Adolescence

KAWABATA Yoshiko

I. は じ め に

人はその発達過程において、様々な対象との関係を体験してゆくが、その様々な人間関係の体験のあり方は、その後に遭遇する新しい人間関係のあり方に大きな影響を及ぼしている。ここでは、限りなく存在する人間関係のなかでも、生涯にわたっての拠り所となる重要な人間関係のひとつである「結婚」関係を取り上げ、そのイメージ(結婚像)について論じたい。

「結婚像」を調べると言っても、対象をどの層に向けるかによって、それはまったく異なった意味をもってくる。未婚者にとっての結婚像は、「将来像・期待像」の性格が強くなるだろう。既婚者を対象にした場合にも、その人が結婚周期のどの時期に位置しているかによって、結婚像は大きく左右されることになる。たとえば、結婚直後には、まさしくそのプロセスに巻き込まれ、揺り動かされているために、「結婚」を対象化して捉えることが難しい場合があるだろうし、また、老年の既婚者は「結婚」から距離をとって、客観的な姿勢で結婚像を描けるかもしれない。

筆者は「夫婦」関係すなわち夫婦間の力動、価値観や役割意識に関する葛藤、妥協、対決といった心理的共同作業に関する研究を課題とするものであるが、それらとの関わりにおいて、まず、結婚以前の青年がもつ結婚像および夫婦像を取り上げた。

未婚青年の抱く結婚像は、その個人の過去の人間関係史を拠り所にして形成されたものである。ゆえに、個人間に差異が生ずることは当然と言えるが、人間関係の体験史が、発達的にある程度共通した過程を辿ることも確かであろう。さらに、個体発達的に見ても、青年期には様々な身体的・心理的变化が存在する。従って、本論文が対象とする青年(中学生、高校生、専門学校生)において、結婚像の発達的な変化が何らかの形で示されることが予想される。

また、個人史はどうあれ、未婚者にとっての「結婚」があくまで未知のものであり、将来切り開いてゆくべき世界であるからには、その「期待像」としての結婚像のなかに、空想的な「非現実性」が含まれることも、当然考えられる。

そこで、青年の抱く結婚像・夫婦像が形成される発達過程を複数の角度から検討することを本論文の主たる目的とし、併せて、結婚像の「現実性」・「非現実性」という観点からも考察したい。

II. 意識調査からみた青年の結婚観

A) 筆者による調査

未婚青年の結婚観に関する従来の研究は、それぞれの立場から青年の結婚観を明らかにしてい

る(田村 1968, 詫摩 1973, 湯沢 1985, 総理府 1971)。しかし、それらの結婚観が形成されてきた複雑な過程は扱われていない。そこで、筆者は、結婚・夫婦に関する意識の態度が成長過程においてどのように形成されるのかに注目し、その発達の変容を明らかにしたいと考えた。本調査では、青年が抱く結婚観(像)のより細かいニュアンスを汲み取り、内面に踏み込んだところでの結婚像・夫婦像を探るために、自由記述による回答を求めることにした。なお、今回は対象

〔表1〕 分類項目

Pu	1) 好きな人と一緒に暮らす 2) 子供を産み育てる・後継ぎをつくる・子孫を残す 3) 自分たちの家庭を築く 4) 一緒に生活し、人生を共にしてゆくためのパートナーを得る 5) 人間は一人では寂しいから誰か一緒に暮らす人が欲しい 6) 老後のため 7) 世間体・体裁・社会的に認められるため 8) 幸せになるため (のみの解答で他には何も具体的な記述がないもの)
P	1) 好きな人と一緒にいることができる 2) 子供をもてる・夫婦子供が円満 3) 相談し頼りにできる人がいて、精神的な支えを得る 4) 楽しそう・賑やかさ・明るい家庭 5) 仕事を分担し、協力し合う 6) 自分たちだけの家庭を築く 7) 夫の世話ができる・夫に尽くせる 8) 人間的に成長できる・互いに刺激し合える
N	1) 時間的な制約を受ける・自由な時間がもてない・家庭に束縛される 2) 離婚する 3) 生活を共にすると次第に相手の欠点が見えてくる 4) 喧嘩をする 5) 親や親戚の問題でもめごとが起こる 6) 次第に関係がマンネリ化する・新鮮さがなくなる 7) 金銭面で苦労する
I	1) お互いに理解、信頼し合っている 2) 仕事、作業面で協力し合う 3) 言語的な関わりをもてる (何でも言える、話し合える、会話が深い) 4) 相手に対する思いやりがある 5) 仲が良い (のみの解答で他には何も具体的な記述がないもの) 6) 愛し合っている・愛情がある 7) 家族、子供を大切にする 8) 新鮮である・恋人のような関わりがある 9) 年老いてもいつまでも仲が良い

を青年期女子にしぼり検討する(注)。

被検者 大阪府下の中学2年生女子(41名)、高校2年生女子(47名)および専門学校生(99名、平均年齢19.2歳)、計187名。

調査内容 質問紙 B4版 1枚。各設問の下に数本の線を施し、自由記述による回答を求めた。設問は順に、1)「結婚の目的(Pu: Purpose of Marriage)」“人は何のために結婚するのでしょうか。(あなたが結婚するとしたら、それは何のためでしょうか?)” 2)「結婚・夫婦に関する肯定像(P: Positive Image of a Married Couple)」“結婚の良い面と言ったらどんなところでしょうか。(あなたが結婚について、いいなと思っているところを述べてください。)” 3)「結婚・夫婦に関する否定像(N: Negative Image of a Married Couple)」“結婚の悪い面と言ったらどんなところでしょうか。(あなたが結婚について、嫌だなと感じているところを述べてください。)” 4)「結婚・夫婦の理想像(I: Ideal Image of a Married Couple)」“良い夫婦とはどんな夫婦だと思いますか?(夫婦にとって大切なものは何でしょう?)”

調査の方法 1989年、4月、集団法により実施。筆者の依頼により、各授業の担当者によって施行された。回答の数は限定されず、被検者に委ねられた。

結果の処理 本研究は探索的な方法をとることから、事前に回答の分類枠を設定することはせ

〔表2〕 Purpose of Marriage (%)

項 目	中2	高2	専門	全体
1)好きな人と一緒に暮らす	36.6	44.7	28.3	29.3
2)子供をつくる	19.5	29.8	17.2	22.8
3)自分達の家庭を築く	12.2	21.3	12.1	13.8
4)パートナーを得る	2.4	12.8	15.2	11.4
5)一人では寂しいから	12.2	2.1	9.1	10.0
6)老後のため	2.4	6.4	13.1	6.2
7)世間体・社会的位置づけ	0	2.1	11.1	6.2
8)幸せになる(のみの解答)	2.4	6.4	5.1	5.2

〔表3〕 Positive Image (%)

項 目	中2	高2	専門	全体
1)好きな人と一緒に居れる	39.0	48.9	44.4	44.4
2)子供をもてる	17.1	17.0	19.2	18.2
3)精神的な支え・安心	2.4	14.9	28.3	19.3
4)楽しさ・賑やかさ	14.6	17.0	14.1	15.0
5)仕事分担・協力する	12.2	19.1	7.1	11.2
6)自分たちの家庭を築く	9.8	10.6	5.1	7.5
7)夫の世話。夫に尽くせる	2.4	4.3	9.1	6.4
8)人間的な成長	0.0	0.0	9.1	4.8

ずに、得られた回答の内容に従って項目を設け、回答を分類した。「結婚の目的(以下“Pu”と記す)」「結婚に関する肯定像(P)」「結婚に関する否定像(N)」「結婚・夫婦の理想像(I)」それぞれについて、得られた分類項目の内容を、全体としての出現率が高かった順に表1に示した(但し、一部例外を除き、全体での出現率が5%以下の項目は省略した)。

結果 Pu, P, N, I それぞれについて、各項目の回答出現率は表2～5、図1～4に示した通りであった。設問別に結果を以下にまとめる。

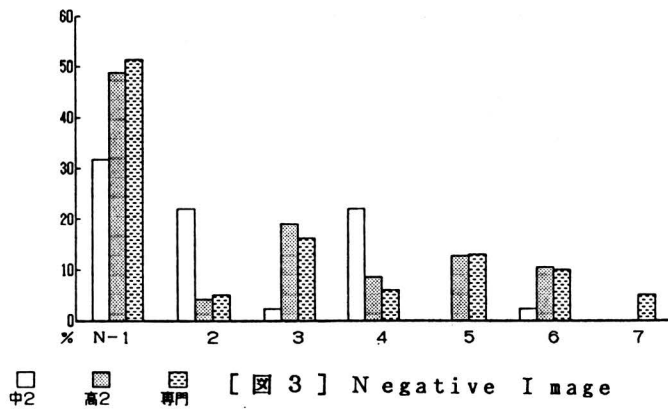
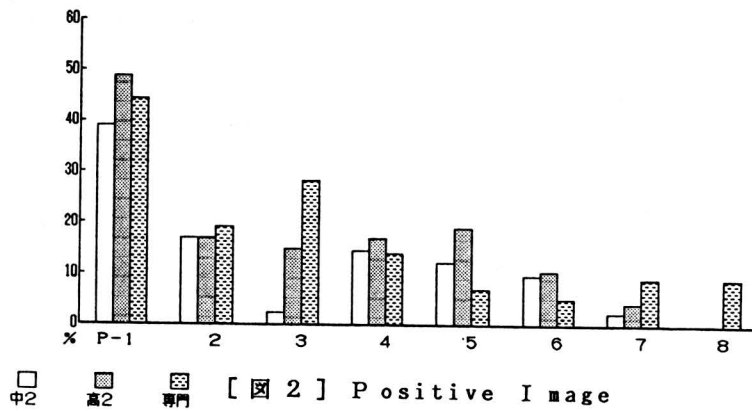
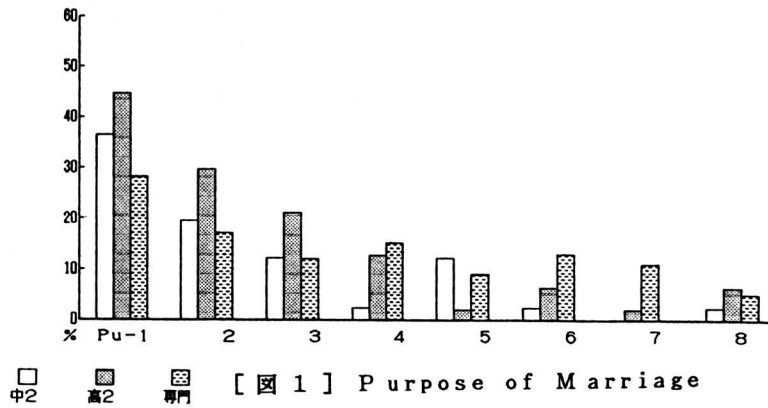
1) 結婚の目的(Pu) どの年齢群においても、結婚の目的としてもっとも高い割合を示したのは、「好きな人と一緒に暮らす」であり、次が「子供をもつ」であった。この2項目においては、ともに高校生が1番高い割合を占めた。第3位以降の項目で年齢群間に差が現れ、中学生と高校生は「自分たちの家庭をもつ」が3番目にくるのに対し、専門学校生は「パートナーを得る」が3番目に多く、次に続く「自分たちの家庭をもつ」を上回っている。「パートナーを得る」については、高校生は「自分たちの家庭をもつ」に次いで専門学校生に近い割合を示しているのに対し、中学生ではずっと少ない($\chi^2=3.324$ $P<.10$ $df=1$)。「老後のため」「世間体、社会的地位」という項目は、専門学校生では4番目までの項目とかなり近い割合で出現し、中学生、高校生に比べて有意に高いことが示された(順に、 $\chi^2=4.155$ $P<.05$ $df=1$, $\chi^2=7.718$ $P<.01$ $df=1$)。

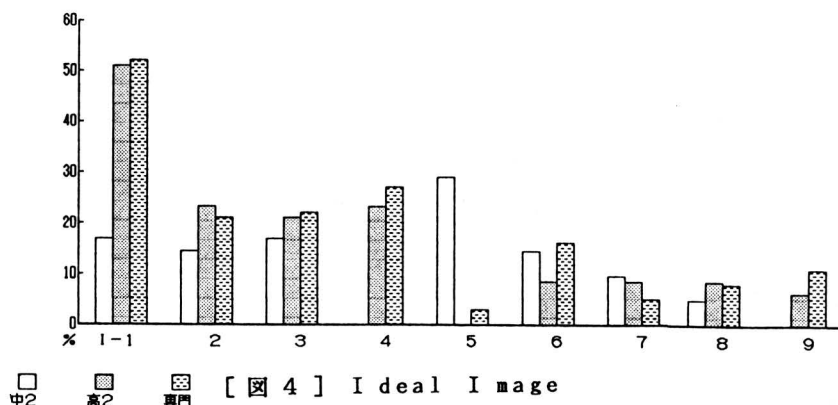
〔表4〕 Negative Image (%)

項 目	中2	高2	専門	全体
1)自由が制約・束縛される	31.7	48.9	51.5	39.0
2)離婚する	22.0	4.3	5.1	11.7
3)相手の欠点が見えてくる	2.4	19.1	16.2	10.7
4)喧嘩をする	22.0	8.5	6.1	10.7
5)親や親戚の問題・もめと	0	12.8	13.1	7.9
6)マンネリ化	2.4	10.6	10.1	6.9
7)金銭面の苦勞・困難	0	0	5.1	5.5

〔表5〕 Ideal Image (%)

項 目	中2	高2	専門	全体
1)理解・信頼し合っている	17.1	51.1	52.3	38.3
2)協力し合う	14.6	23.4	21.2	18.3
3)言語的関わりをもてる	17.1	21.3	22.2	15.5
4)相手への思いやりがある	0	23.4	27.3	15.2
5)仲がいい (のみの解答)	29.3	0	3.0	14.8
6)愛し合っている・愛情ある	14.6	8.5	16.2	12.8
7)家族・子供を大切にする	9.8	8.5	5.1	7.2
8)新鮮である・恋人のよう	4.9	8.5	8.1	6.6
9)いまでも(老後も)仲がいい	0	6.4	11.1	5.2





2) 肯定像 (P) 全年齢群を通じて、「好きな人と一緒にいることができる」がもっとも高い割合を示す回答であり、「子供をもてる」も全体にわたって高い割合を示した。特徴的なのは、「精神的な支えを得る」で、中学生で2.4%、高校生で14.9%、専門学校生で28.3%と年齢が高くなるに従って割合を増し、学年間に有意差が見られた ($\chi^2=13.223$ $P<.01$, $df=2$)。また、「人間的な成長」は、中学生や高校生ではまったく見られない回答であったが、専門学校生になって4.8%出現し、統計的に有意差が示された(直接確率計算法 $p=0.005<.01$)。

3) 否定像 (N) 「自由の制約」が全年齢群でもっとも多かったが、中学生では3人に1人程度がこれを指摘したのに対し、高校生・専門学校生ではおよそ2人に1人が指摘し、その間に有意差が認められた ($\chi^2=4.633$ $P<.05$, $df=1$)。また、「相手の欠点が見えてくる」「親や親戚の問題」という回答は、中学生ではほとんど見られなかったが高校生・専門学校生で現れ、やはり有意差が示された(順に、 $\chi^2=6.260$ $P<.05$, $df=2$, $\chi^2=4.598$ $P<.05$, $df=1$ イエーツの修正)。「マナー化」も中学生ではわずかに2.4%であるが、高校生・専門学校生ではおよそ10%を占めている。一方、「離婚する」や「喧嘩する」は、中学生が他に比べ有意に高い割合で現れた(順に、 $\chi^2=9.949$ $P<.05$, $\chi^2=6.429$ $P<.05$, 共に $df=1$ イエーツの修正)。中学生・高校生では見られなかった「金銭面の苦勞」は、専門学校生で5.1%の割合で出現した(直接確率計算法 $P=0.079<.10$)。

4) 理想像 (I) 全体的な特徴としては、中学生と他の年齢群間の差が目立ったことが指摘できる。「理解・信頼し合う」や「相手に対する思いやり」は中学生が他より有意に低い割合を示し(順に、 $\chi^2=15.896$ $p<.01$, $\chi^2=13.687$ $P<.01$, 共に $df=2$)、逆に、「仲が良い」は中学生が他よりも有意に高い割合を示した ($\chi^2=28.548$ $P<.01$, $df=1$, イエーツの修正)。つまり、中学生では理想像として「仲が良い」ことが1番にあげられ、「理解・信頼」は2番目にくるのに対し、高校生と専門学校生では「理解・信頼」がもっとも高い割合を占めるのである。そして、中学生ではまったく出なかった「相手への思いやり」が高校生で大きく伸び、「協力」や「言語的関わり」も等しい割合で重視されるようになっている。その一方、中学生でもっとも高い割合を示した「仲が良い」は、高校生や専門学校生ではほとんど見られなくなった。

考察 —— 発達的な変化について ——

中学生が重視している「仲が良い」「喧嘩をしない」「離婚しない」は、子供である自分にとって居心地の良い家庭を保つのに必要な“夫婦＝両親”の条件である。つまり、中学生は、結婚観・夫婦観を問われた場合、自分自身のこととしてよりも、自分の両親に関わることとして捉えてしまう傾向が強いと言える。この段階の子供は親への依存が未だに強く、父親と母親を独立した pair として見るのが難しいのである。回答文が全体的に短く、複数の視点がもてないという傾向も、夫婦を客観的に捉える姿勢がまだ十分に発達していないことを示していると言えよう。しかし、「理解し合い、信じ合っている」夫婦を理想とし、夫婦のなかに「自由の制約」を感じ始めていることも見逃せない。この点に関しては、より年少の子供との比較によって一層明らかになると考えられる。

高校生になると、「理解し合い、信じ合う」こと、「相手に対する思いやりをもつ」ことを夫婦の理想として重視する見方が増え、「精神的な安定」を結婚の肯定面としてあげ、「パートナーの獲得」を結婚の目的とするものが増加する。そして、ただ「仲が良ければ良い」というだけの夫婦の捉え方は姿を消してゆくのである。Fordham (1969) は「結婚において葛藤が不可避なことは、男性と女性が対立するものであるという象徴的な公式に十分表現されている」と述べているが、固有の成長の歴史と価値観をもった個人と個人がともに暮らしてゆくことは、葛藤と対決の過程である。中学生の回答に多く見られた「喧嘩なく争わずにやってく」という夫婦の理想像がある意味で“幻想”であるとするれば、高校生はそのような幻想に気づき、葛藤の存在を認めた上でそれを乗り越えてゆくに重要なもの、すなわち「協力」「理解・信頼」「思いやり」を重視するようになるのだと考えられる。結婚生活の「不自由さ」「幻想の崩壊」「マナー化」「現実的な苦勞」をはっきりと意識し始めるのもこの時期である。

高校生と専門学校生との差は、中学生と高校生との差に比べてさほど顕著ではないが、視点の多様化・結婚に対する親密さの増大という点で注目できるだろう。特徴を挙げると、Pu で「老後のため」「世間体」が多くなること、Nに「金銭的な苦勞」が現れること、Pでは「精神的な安定」を答えるものが増加したことなどである。また、夫婦が互いに刺激を与え合い、自分を抑えることを学び、二人で力を合わせて困難を乗り越えてゆくなかで「人間的な成長ができる」という回答をするものが専門学校生になって初めて現れ、統計的な有意差が認められた。この年齢は、人間的成長を促進する力を与え合う関係として夫婦を捉え始める時期でもあるようだ。

B) 従来の研究との比較**a) 「結婚の目的」について**

詫摩は、結婚の動機として、第一に「親への依存性を脱却し、独立した生活を築くこと」、第二に「愛情に基づいて、お互いに理解者を求め合うこと」、第三に「性の要求」を挙げ、さらに「社会」からの要請を指摘している。ここで、今回の調査で得られた「結婚の目的」を、未婚青年を対象に行われた過去の調査結果と比較してみることにする。

湯沢は1969年から1970年にかけて、大学生、短大生および中、高卒の工員を対象に結婚観の調査を行ったが、青年期の女子が結婚の目的として回答したのは、「独身よりはましだと思うから」「一生独身では寂しいから」「中年以降のことを考えて」といった消極的なものから、「女性の一歩の目的だから」「人生を幸福に送る一つの道だから」「人間として当然のなりゆき」という当然

論を経て、「子供が欲しいから」「親が作った家庭ではなく、自分自身の楽しい家庭をもちたいから」「人間として完成するため」といった積極説まで示されたことを報告している。さらに、彼は、「好きな人とできるだけ一緒にいたいから結婚する」という素直な回答は、アメリカの一般男女に比べてほとんど現れなかったことを指摘している。今回筆者が行った調査では、中学生、高校生、専門学校生すべてにわたって、「好きな人と一緒に暮らす」ということが結婚の目的としてもっとも高い割合を占める回答であった。これは、湯沢の指摘とは異なる結果である。彼は同報告のなかで、「20歳前後の短大生には、『好きな男性と楽しい家庭を作りたい』といったアメリカ風な快楽主義的結婚観が2割近くあって、新しい時代の流れが感じとれた。」とも述べている。今回の調査結果との差異を考えるうえで、20年という歳月の隔たりを無視することはできないだろう。ただし、この点に関しては、結婚ファンタジーにおける「期待像」という観点から、後節で取り上げたい。

総理府が1971年に15～24歳の青年を対象に行った調査報告から女子の回答を見ると、結婚の理由として肯定的な回答は、①互いの協力によって自分たちの家庭を築ける(肯定率93.4%)②精神的に安定する(84.4%)③自分たちの子孫が残る(73.7%)④経済的に安定する(63.3%)⑤社会的に信用される(63.1%)⑥性的満足が得られる(49.7%)⑦日常生活が便利になる(34.5%)の順であった。総理府の調査は、上の7つの項目を示して段階評定を求めるものであったために、たとえ潜在的には他の回答が被検者の中に存在していたとしても、それは抽出できていないので、「好きな人と一緒に暮らす」という目的については残念ながらここでは論じ得ない。総理府の調査報告での①と③に関しては、筆者の調査結果でも同様に重視されている。また、②は「目的」には現れなかったが、結婚の「肯定的なイメージ」のなかで、高校生以上において高い割合を示していた。

b) 両親のなかに見る「理想的な夫婦像」との比較

田村は、女子青年たちがその両親の結婚生活に対してもっている態度の因子構造を明らかにする目的で調査を行い、“協調性”“情緒的成熟性”“子への依存性”という3つの因子を抽出した。つまり、自分の父親と母親の結婚生活を望ましいと認知している女子青年は自分の両親を、「性格が合っている」「優しく思いやりがある」「隠しだてをしない」「相手のことを考える」「一緒に外出することを喜ぶ」等の“協調性”をもち、「怒りっぽくない」「感情的でない」「わがままでない」「不平不満を言わない」「口げんかをしない」「することに干渉しない」等“情緒的成熟性”に優れ、「老後を子供の世話に頼っていない」「子供との同居を望むと話していない」等“子への依存性”が低い夫婦であると評価したのである。この結果に見る「夫婦として望ましい両親」像を、今回筆者が行った調査で得た「理想的な夫婦像」「肯定的な夫婦像」と比べてみると、「理解・信頼」「協力」「思いやり」等、“強調性”はかなり共通している。「仲が良い」「楽しさ・賑やかさ」「精神的な支え」は“情緒的成熟性”と解釈できるであろう。しかし、“子への依存性”については今回の調査から一致する結果は得られなかった。ただし、田村の用いた質問紙はあらかじめ用意された項目に4件法で解答するものであるから、自由記述形式で行った今回の調査結果との比較は慎重でなければならないだろう。

以下、今回の調査結果を手掛かりとして、さらに考えを進めてみたい。

III. 「結婚」像の形成に関わる要因について

——対象関係を中心に——

人は、その成熟の過程において様々な対象との関係を経験してゆくが、その際、それぞれの段階での対象選択のあり方は重要な意味をもっている。そこで、依存対象の発達的变化という視点から、夫婦(カップル)像の形成過程について考えてみたい。

子供のなかで夫婦像が育ってゆく過程では、そのイメージのモデルとして、両親の存在が重要である。しかも、子供と両親の間には、子供が親夫婦を客観視できるようになる以前の、非常に複雑な依存関係が存在する。従って、対象化された夫婦像が子供のなかに生まれ発展する過程は、依存対象として主観的に関わってきた両親からの身体的・精神的な独立が進んで、両親を客観的に捉え始めてゆく過程と密接に関わり合っていると考えられる。

Mahler (1975) は、幼児が両親、特に母親表象を内在化し、対象恒常性を獲得するまでの過程を分離—個体化期と名付けた。この内在化された依存対象をよりどころに潜伏期を通過した後、青年期に至ってこの内在化された幼児性欲の対象である両親表象からの脱備給が始まるのだが、親からの精神的な分離・自立を成し遂げ、個を確立してゆく過程という意味で、Blos (1967) は青年期を「第二の個体化期」と捉えている。

Blos (1962) は青年期をさらに5つの発達時期に細分し、それぞれの段階の特徴、発達課題を明らかにした。およそ中学、高校生に相当する青年期前期・中期に関して、彼の論じているところを、リビドー備給と対象選択の点から見てみる。青年期前期(early adolescence)は、一次的愛情対象、すなわち両親からの分離を試みる時期である。両親表象からの脱備給によって浮動性を高めたリビドーは、交友関係に向かい同性仲間との理想化された親密な友情を導くか、もしくは、自己愛リビドーに変換されて自我理想を拡大する。そして、青年期中期(middle adolescence)になると、近親相姦的对象へのリビドー備給の最終的、不可逆的な撤退が確立され、内的体験や自己発見への傾向が顕著になる。自己愛的・両性的構えの放棄によって可能となった異性愛的対象の発見が、この時期の心理学的発達の特色である。そして、その後、統合の段階へと進んでゆくのである。

Dunphy (1963) は青年期の仲間集団を年代別に5つに分類し、それらの発達段階を提唱した。それによると、青年期の仲間集団は、独立した同性クリーク(3~9人の徒党)の段階、異性のクリーク間の結合が始まり両性からなるクラウド(15~30人からなる仲間)が出現する段階、異性クリーク間の密接な結合が見られる段階、クラウドが解体しステディや婚約者の関係にある男女からなるクリーク(カップル)が互いにゆるい結合を保つ段階へと発達してゆく。つまり、児童期以前には両親に焦点化されていた依存が、友人仲間を経て、一人の異性へと再び焦点化される過程を示している。

高橋(1968 a, b, 1970) は女子を対象に依存性の発達的研究を行い、中学、高校、大学と進むにつれ、依存性は、質的に一層構造化された状態へと向かうことを明らかにした。すなわち、単一の焦点をもつ方向へと発達するのである。両親に中心化されていた依存が、両親からの離脱に伴って分化散在する時期を通った後、再び一人の対象に中心化されるという彼女のモデルは、先に記した Dunphy のモデルと重ねてみると一層理解しやすいものとなる。

以上に見たように、依存性の発達は、両親に中心化されていた依存が、友人、親友を経て、一

人の異性へと再中心化されてゆくという過程を迎えることが明らかにされてきた。それでは、この依存対象の発達的变化のなかで、結婚像・夫婦像の形成と変容はどのように位置づけられるであろうか。筆者の行った調査の結果を手掛かりに、Blos, Dunphy らの理論に沿って検討し、結婚観の発達の変容を明らかにしてゆくことにする。

依存の対象が両親に中心化される段階の子供は、夫婦を自分との関わりのなかで捉えることが多い。ここでいう「夫婦」はその子供の「両親」と重なる。もちろん、そのなかでも、生活面では一応の自立が成立する年齢になると、両親の関係のなかに自分には入り込めない世界を見て、「夫婦」を捉え始める子供がいる。その芽は、子供が書いた詩や作文や遊びのなかに表現され、窺い知ることが多いが、この点に関する検討は他の機会に改めて取り上げたい。

青年期前期(中学生)は Dunphy の仲間集団の発達段階によれば、第1または第2段階に属する。それは、友人に最も重要な価値や忠誠心が向けられ、親友と互いに認め合う能動的な人間関係が主体となる時期であり、子供たちは親との関係を断って親子関係を問い直そうとする。家族の拘束から抜け出して自己決定の権利に目覚めるのである。それは、視点を変えれば、両親を自分とは別の存在として対象化し始めるときであるとも言える。しかし、新たな段階へと移行する過渡期には、過度に親との関係を断ち切ろうとして、「知らん!」「関係ない!」といった“そっけない”関わりが出る一方で、自分の都合に合わせて親に依存するなど、一貫性のない不安定な時期を通過しなければならない。両親からの脱離によって浮動性をおびたりビドーが自己愛に変換される結果、現実検討が低下し、両親がかつてもっていた権威を象徴するあらゆる権威に対して反抗するような行動が出現することを、Blos も指摘している。本調査の結果を見ると、回答文が短いという特徴に加え、無回答の出現率が中学生でもっとも高かったことは、“投げ遣りさ・そっけなさ”というこの時期特有の傾向を示していると言える。また、一方では、子供である自分にとっての居心地の良い家庭を保つための夫婦(両親)を求める自己中心的な態度が浮彫りにされ、夫婦を客観的に捉える姿勢がまだ十分に発達していないことが示唆されていた。

青年期中期(高校生)は、Dunphy の発達区分の第3ないし第4段階に属する。依存の対象は親友が主となり、親からの自立に伴う反社会的な混乱や身体的な急変も一応一段落するものが多い。なかには異性との1対1の付き合いを経験し始めるものが出てくる。しかし、Blos が「異性に愛情を感じる能力が育ち、恋愛が芽生えるが、青年期中期における恋愛は肉体的な恋愛ではなく精神的な恋愛を意味する」と述べているように、この時期は、現実に異性との依存関係を経験することよりも、むしろ内的世界のなかで異性との依存関係を経験することの方が重要である。また、日記を付けることに代表される「自己との内的な会話」も重要な意味をもつと考えられる。高橋は「依存表現がオーバートなものから内的なものに変わってゆく」と述べているが、自己の内界で異性関係のイメージが培われるのである。それと平行して、両親から心理的な距離をとることができ、父親と母親を夫婦として捉える力がついてくる。つまり、夫婦関係を客観的に対象化して見るようになると言えるだろう。

青年期後期(専門学校生)に進み、Dunphy の発達段階では第5段階に達すると、依存対象は恋人へと焦点化されてゆく。異性との1対1の付き合いが始まるなかで、カップル像はより現実に近づき、親密さを増してゆく。高校を卒業した彼女等の生活圏、他者との付き合いの幅は大きく拡大する。世間の目は、彼女たちを一人前に扱う厳しさを増してくる。一個の人間としての責任

性が増すにつれ、依存の対象は特定された一人の異性へと再中心化されるのである。そして、結婚および夫婦像はさらに現実的な性質を帯びて具体的かつ多様化したものへと変容してゆくと言える。

IV. 「結婚」像の非現実性

——「期待像」としての結婚ファンタジー——

III. では、依存対象の変化という視点から、結婚像の変容について考察した。ここでは、年齢差に関係なく、どの群にも共通して現れたイメージに注目し、結婚像に含まれる「非現実性」の問題を取り上げたい。

筆者の行った調査のなかで、結婚にいわゆる“ロマンチック”な関係を期待する回答は、全年齢群を通してかなり上位を占め続けていた。夫婦を客観的に対象化して捉える力が発達するにつれて、幻想的な夫婦像は次第に崩れ、現実的な色合いを強めたイメージが育ってくるのだが、愛する人との「仲睦まじい生活」を夫婦の理想像としてあげるものは、年齢が増加しても減少してはいかないのである。それは、年齢を越えて青年女子のなかに存在する結婚ファンタジーを表していると言えるのではないだろうか。そして、その“ロマンチック”なイメージは、結婚に関する「期待像」を形成する重要な要素となっていると考えられるが、この点については、従来の研究ではあまり言及されてこなかったようである。専門学校生には、客観的な立場に立って対象化された結婚像・夫婦像を複数の角度から記述した後、さらに、“私個人としては”と主観的な立場を明記した上で、「愛する人と一緒にずっと仲良く暮らしてゆきたい」という“ロマンチック”な夢を記す者が特徴的に多く見られた。この傾向が女子特有のものであるか、それとも青年男子にも共通して見られるものであるかの検討は今後の研究に委ねなければならないが、結婚・夫婦に関するイメージが客観化、多様化する過程のなかで、主観的には一貫して“ロマンチック”な憧れを含んだ結婚ファンタジーが生き続けてゆくという結果には無視できないものがある。では、その意味をどのように解釈すれば良いであろうか。

青年を対象とした最近の調査をみると、結婚を必ずしなければならないものとして捉えている若者(特に女性)の割合は以前に比べて減少しているのに対し、その人自身としてはやはり「結婚はしたい」と答えるものが圧倒的に多い。文化的な観点から考えれば、結婚にある種の“甘い”性質を与えるファンタジーはステレオタイプな「期待像」として、結婚願望を呼び起こすための重要な役割を果たしていると言えるかもしれない。

また、視点を変えると、幻想的な部分も含め、“ロマンチック”な結婚ファンタジーは、現実には結婚を成立させ希望をもって夫婦関係を築き始めるための重要な原動力として働いているとも解釈できる。

V. 終わりに ——今後の課題——

結婚像は、「結婚」をあまりに理想化し過ぎても、また、過度に現実的に捉え過ぎても、どちらもふさわしいイメージの形成とは言いにくい。過去の人間関係の体験のあり方は、結婚像の形成に様々なヴァリエーションを与え、その結果、個人差がもたらされる。しかし、結婚像の個人差に関しては、本論文において取り上げることができなかった。今後の課題としたい。

川畑：青年期女子における「結婚」像の変容について

また、今回の研究では青年女子の結婚像を扱ったが、青年男子の結婚像との比較、ならびにその後の変容を縦断的に追ってゆくことを、以後の課題として検討を進めてゆきたいと考える。

(注) 本調査は青年期の男女を対象に実施したが、一部の年齢群で被検者の男女比に著しい偏りがあったため、ここでは女子の回答のみを取り上げて論じた。調査の全体的な結果については、日本心理学会第53回大会(1989)で発表した。

引用文献

- Blos, P. (1962) On Adolescence. The Free Press Glencoe, Inc.
Blos, P. (1967) The Second Individuation Process of Adolescence. The Psychoanalytic Study of the Child, 22, 162-186, International Universities Press, N. Y.
Dunphy, D. C. (1963) The Social Structure of Urban Adolescent Peer Groups. Sociometry, 26, 230-246.
Fordham, M. (1969) Children as Individuals. Hodder and Stoughton Limited.
浪花博 岡田康伸訳 『子供の成長とイメージ』 誠信書房 (1976)
Mahler, M. (1975) The Psychological Birth of the Human Infant. Basic Books, N. Y.
総理府青少年対策本部 (1971) 『青少年の性意識』 大蔵省印刷局
高橋恵子 (1968 a) 依存性の発達の研究 I, 教育心理学研究, 16, 7-16
高橋恵子 (1968 b) 依存性の発達の研究 II, 教育心理学研究, 16, 216-226
高橋恵子 (1970) 依存性の発達の研究 III, 教育心理学研究, 18, 65-74
詫摩武俊 (1973) 『現代青年の性意識』 現代青年心理学講座 5 金子書房 (1973)
田村喜代 (1968) 両親の結婚生活に対する大学生女子の態度—結婚生活の適応への準備性として—『現代青年の人格形成』 依田新編 金子書房 (1968)
湯沢雍彦 (1985) 結婚観のうつり変わり 『講座 現代・女の一生 3 恋愛・結婚』 岩波書店
(博士後期課程)